アジア経済研究所 50 周年記念　発展途上国研究奨励賞受賞者連続講演会
講師　佐藤　仁氏（東京大学東洋文化研究所准教授）
日時　平成 22 年 7 月 14 日
会場　アジア経済研究所C21 会議室

「『希少資源のポリティクス』以後―テーマの展開と方法論的回顧―」

受賞作「希少資源のポリティクス」について

今日は、お招きいただいてありがとうございます。この本で賞を頂いたのがもうかれこれ 7 年前なので、完了した仕事として本棚に置いておくという感じでしたが、今回もう一度自分がやったことを振り返るいい機会になりました。私の場合まだようやく中堅だと思っているので、今日はこの本について振り返るというよりこの本の中で考えていたこと、あるいはこの本の中に埋め込まれていた研究の種がその後どういうふうに実を結んだのか、あるいは実を結びつつあるのかという趣旨でお話をさせていただこうと思います。

私の本はいつもそうなんですけれども、本屋がどこに置いていいか分からない、売りにくい本だと思うのですね。（受賞作も）うーんと考えて「経済」とか、大きい書店だと「海外事情」とか「環境」になるのですが、「環境」に入れられると理工系のフロアになってしまって本来読んでほしい人の目に触れにくい。私のようにどの分野に属しているのかよく分からない人間にとっては非常に悩ましい問題です。

（受賞作は）私から見ると大体 95%くらいは他人の仕事のまとめ直しだと思っています。どのぐらいオリジナリティーがあるかと考えると、5%ぐらいはあるかもしれない。その 5%の中身は、人々が具体的にどんなふうに森林資源に依存しているかはかるということ、それから天然資源の社会科学に関して総覧的にどういう問題があるかという批判、森林資源と農地の制度史についてまとめたぐらいかなと思います。ただこの本に関する書評を見ると、この 5%の部分に言及しているものはほとんどなく、ここが私の売りだと言っているところはなかなか世間の一般読者には通じないものだなと思いました。反省していることは、もともと博士論文がベースになっているので審査員の顔を思い浮かべながら突っ込まれることを予想して埋めていくという作業をやった結果、いろいろ盛り込み過ぎてめりはりがない、パンチ力に欠けるのではないかと思います。先ほど申し上げたように私の研究はいわゆる地域研究でもない、人類学でもない、経済学でももちろんなくて、政治学でもこういうのは余りないので、既存の専門分野に当てはめにくい。それに対してアジ研の賞をくださったというのは、こういう研究もありだよという励ましを頂いたのかなと非常に勇気づけられたことを思い出しました。

私がフィールドワークをしていた村はタイ中西部ウタイタニ県にある山奥のカレンの人々が住んでいる集落です。（当時）天然資源、特に森林に関して「貧困こそ環境破壊の原因である」という貧困と環境破壊の悪循環説がいろいろな権威ある社会科学研究の書物、ODA 白書あるいは研究論文等にも出ていた。果たして貧困が本当に環境破壊の主たる原因と言えるだろうかということに関して、私は大学院時代おぼろげにそうではなかろうと思っていました。といいますのも、本当に貧しければ大規模な資源破壊をする力はそもそも持っていないはずで、本当の原因はもっとほかのところにみるべきだろうと思っていたのですが、貧困と環境破壊、あるいは貧困と環境利用の関係について実証的に調べた研究というのは当時ほとんどなかったのです。それを自分なりにやってみたいと思い、タイの中で唯一自然遺産、世界遺産に指定されたトゥンヤイ・ファイカケンという森林地帯の周辺にひっそりと暮らしている少数民族の集落で、彼

らが具体的にどれぐらい森の資源を利用しているのか、同じ村の中でも豊かさの差に応じて人々の森林の依存率が違うかどうかを調べたわけです。

そこから出てきた幾つかの理論的なテーマの一つは、「ローカルに見ると非常に豊かだけれどもグローバルあるいはナショナルに見ると稀少な資源を管理する」という課題があるときに、国家の介入というものがドミナントになって、豊かな資源のそばに暮らしている人々が資源を自分たちの生活の豊かさに転換することを許されずに弾き出されてしまう。このような稀少性が持っている政治的な効果をみなくては、という気がしてきました。

環境保護の時代になってそういう現象が各地で見られるようになったのですけれども、実は開発の時代、タイで言えば 60 年代、70 年代の盛んに森林伐採が行われた時代も、地域住民は木材収益等の便益に必ずしもあやかれたわけではない。もちろん農地を開墾する形で便益を得ていた人たちもいるけれども、私がフィールドワークをしていた地域では 70 年代も業者が大きな木をどんどん持っていって、（地元住民が）切って売ったりしようとするとそれはけしからん、と言われてきました。開発の時代も環境保護の時代も費用と便益の分配という観点から見ると一貫した状況が続いてきたということです。

結論は貧しい人々が森林破壊をしているということでは必ずしもなく、どちらかといえばトップダウンの森林保護政策が人々の生活の幅を狭くしている。具体的には彼らが行っていた循環型の焼畑移動耕作で耕作してよいエリアが狭くなって、それを補うために化学肥料を買わなければいけなくなって、とうとうより市場、現金に依存した生活に追い込まれるようになった。

この問題を考えるときに、森林を潜在的な農地としてみようとする人とか、あるいはエコツーリズムの源泉とみようとする人とかいろいろな人たちがいて、その人たちの配置を考えながら資源の保全問題を考えないと、従来のように単に森だけを守れ、生物多様性を守れというようなことを言っても、ほとんど効果がないし余り意味がないという認識にも至りました。この本の中で扱ったのは、人間と環境の対立というよりは環境をめぐる人間同士の対立、特に行政の中の部局、つまり貧しい農民に農地を配分することを仕事にしている部局と森林を守ることをミッションとしている部局同士の対立です。住民はまさにそのはざまにいて、上で起こっているけんかのしわ寄せを受けていることが観察できました。

受賞作からのスピン・オフ

この本を書いてから展開したテーマが幾つかあります。フィールドワークの最中から思っていたことですけれども、やはり村人が何をやっているかということだけを調べていてもだめだと。いわゆるコモンズ研究という領域があって、人々がどういうふうに共有資源を利用しているか、そこにわれわれが知らないいろいろな工夫が埋め込まれているという類の言説が 80 年代、90 年代盛んに研究され発表された。けれども、やはりそこに枠を設定している行政とか上からの権力を併せて見ないと、人々の工夫だけを読んでいてもだめなのではないかということは強く思っていました。

そのことを非常に痛切に感じた事件があります。当時タイの森林減少の主たる原因が何かという行政の見解がランクづけされていて、一番は山火事でした。焼畑農民が火のマネージメントをちゃんとしないからその火が森に飛び火して山火事になってしまう。「村人の焼畑はけしか

らん」という言説があったわけです。あるとき村人に、「行政はこういうことを言っているのだけれども、どう思う？」とインタビューをしました。そうしたら（村人は）「実は私は昔国立公園の中で山火事を消すアルバイトをしていた。山火事があって、それをみんなで消しに行くと日当が 150 バーツで、山火事がなくて山小屋に待機していると日当は 100 バーツだ。隊長がみんなの日当を増やすために『おい、火をつけてこい』と。自分は実際にやったことがある。村人の畑のそばでもし大事になってしまったら村人のせいにすればよい」という話をしたのです。話の仕方からしてすごくリアルな感じだった。

もちろんこういったことがタイ全土でどれだけ行われているかは全く分かりませんし、アンケートをとっても誰も正直に答えるはずもないですが、そのときに自分が問題だと思っていた森林減少というものを全く違う観点から見なくてはいけない、つまり山火事によって得をしている人たちの存在、あるいはそれで飯を食っている人たちの存在を併せて考えないと、森を守ることだけを一面的に考えていてもいけないのだなと強く認識しました。そこらあたりから、村人の資源利用というよりは、人々にある種選択の枠を用意している上流政策をもうちょっと理解しなくてはいけないということで少しばかり研究をして、それが文献 1、2 になっています。

この話には続きがあって、役所の中のフィールドワークをしたいなと思ったのです。政策がどういうふうに役所の中で作られるかを知るのは、やはり役所の中に入らないと分からない。役所の中に入る方法で当時私が知っていたのは JICA 専門家になることだった。それで 2004 年から 1 年間、天然資源環境省でタイ政府の環境計画立案を支援することと JICA の今後の対タイ支援のあり方について提案を行うということで入らせていただいた。そこでまたいろいろなことが分かりました（文献 1）。

もう一つは、方法論的にずっと私を悩ませている問題です。結局この「稀少資源のポリティクス」で、幾つかのシーズンに分けて人々が具体的にどんなものを森から採って食べているかということを調べられた村の数は二つです。二つの村を調べてどれだけ一般的なことが言えるのか。同じ森林のそばで熱心にその保護活動をしている村とそうではない村があって、それがどういう違いなのかということについて修士論文を書いて 1994 年に JICA のコンテストに応募したのですが、そのときの選評にも「一つや二つの村を調べて何が分かるのだ」という批判があったのです。そのときから事例研究、つまり比較的サンプルの少ないものを深く調べることがどういう一般的意義を持っているのか、そこに大事なものがあるのは間

文　献

① 「タイの環境政策と地方分権」寺尾・大塚編 (2007) 『アジアにおける分権化と環境政策』アジア経済研究所。

② " Informational Basis of Policy Judgment: The Case of Royal Forestry Department in Thailand, " (2003) *People and Forest: Policy and Local Reality in Southeast Asia, the Russian Far East, and Japan*, Kluwer Academic Publishers.

③ 「開発研究における事例分析の意義と特徴」(2003) 『国際開発研究』12 巻、1 号、pp. 1〜15。

④ " State Action and In-Action in Resource Governance : Political Effects of Natural Resource Technologies in Thailand, " *JICA-RI Working Paper* (forthcoming).

⑤ 「資源論の再検討：1950 年代から 70 年代の地理学の貢献を中心に」『地理学評論』82 巻、6 号。

違いないけれども、上手に言わなくては、あるいは上手に反論しなくてはいけないと思うようになってまとめたのが文献 3 です。

あと、そもそも資源に行政がどういうふうに関心を持って、どういうふうにして行政組織を発達させてきたのかということの研究をしなくてはいけないなと。今やっているのが「資源行政の発達と不作為の構造」、タイとインドネシアを比較して鉱物と森林とか水とか天然資源、環境行政がどういうふうに発達してくるのかを行政組織の組織図を並べながら考えていくという研究を手がけつつあります。これはまだ十分に原稿にはなっていません。

最後に「稀少資源・・・」からのスピン・オフの一つと言えると思いますが、そもそも資源というのは一体何なのか、あるいはこの「資源」という日本語はどこから来たのかということです。日本は長く「持たざる国」という自覚を持ってきたがゆえに資源に関するいろいろな言説とか研究が豊富にあるのだけれども、なぜか非常に密度の高い資源研究が行われていたのはせいぜい 1970 年代までで、その後資源に関する社会科学研究というのはほとんどなくなってしまったのです。日本地理学会では入会するときに「あなたの専門は何ですか」とマルをつけるところがあって、かろうじてそこに「資源論」というのが残っているのですけれども、3000 人ぐらいいる会員でそこにマルをつけたのは私だけではないかなと思うぐらい。もともと資源論をメインでやっていた地理学ですらそんな状況です。

日本の場合は 60 年代後半から 70 年代以降の公害問題というのが非常にドミナントな環境に関する言説になったために、それ以前に存在した資源に関する言説が人々の記憶から消されてしまったのだと思うのです。それを再発見して、その今日的な意義を評価するという作業もここ数年やってきました。具体的には日本には戦後資源調査会という非常に面白い組織があって、大来佐武郎、安芸皎一らがつくった組織ですが、幸い今 80 代後半ぐらいでご存命の方が結構いらっしゃるのです。片っ端から捜し出して訪ねて、お宅に眠っている昔の資料を見せていただくということをここ数年やってきました。この資源論の再発見、「資源論の再検討」というタイトルで「地理学評論」に載せたのがこの文献 5 です。資源については、ほかに書き散らしたものがあるので今まとめて一冊にしているところです。

方法論的回顧：アブダクションへの導入

ここから方法論的な回顧に入ろうと思うのですが、先ほどの「二つの村を調べて何が分かるか」という問いに対する答え方、向かい方をお話ししたいと思います。

貧困と環境破壊の関係という大きなテーマを、二つの村を調べて「ここではそれは成り立っていません」といったからといって、メインストリームの言説に対してはほとんど焼け石に水、「あ、そういう村もあるのね」といって終わる話だと思うのです。ただそこで私がやっていた作業は、ある現象あるいは仮説に対する決定的な真偽判定をするより、起こっていることを説明してくれる仮説を導き出す。この説明原理の部分というのは結構一般的な示唆を含んでいるのではないかと思うのです。論理学の中ではこういった活動、知識の増やし方というのはアブダクションという。インダクションでもリダクションでもない、つまり帰納でも演繹でもなくて、日本語では「仮説形成」と訳している人が多いです。

例えば先ほどのフィールドワークの話に関連させると、「貧困ゆえの森林破壊」という言説が

あることによって得をしているのは誰か、そういう言説が広く流布していることを説明できるセオリーを考えてみる。単に知的な遊戯にとどまるものではなく、政策的な示唆が非常に大きいのではないかと思います。というのも、もし私がタイで見つけた「森林保護政策こそ人々をむしろ貧しくしている」実態があるとしたら、その貧しさを生み出す制度をそのままにしながら対症療法に議論を集中させるということは、非常に偏った政策になることは見え見えです。にもかかわらずそこに議論を集中させたい人々がいるということの理由が分かるようになってくる。例えばゴルフ場を造るとか大規模リゾート開発をするとか、私から見るとより深刻な森林破壊をしている人たちからすれば「貧しいゆえの森林破壊」は聞いていて心地良い。自分たちが特に責めを負うわけではないし、かつ「貧困ゆえの森林破壊」という言説に含まれるある種道徳的なニュアンス、「だから貧しい人たちをどうにかしなければいけないのだ」というような、そこに議論が集中していくことは豊かな人にとっては非常に都合がいい。

それは一例にすぎないのですけれども、天然資源行政あるいは学問自体が断片化している。つまり、森を見る人は森しか見ないし、環境を見る人は環境しか見ないし、開発を見る人は開発しか見なくて、架橋するような研究が余りない。行政も似たような形で断片化されている。いずれにせよ、天然資源の問題というのは技術でどうにかなる、例えば森林の場合だったら木を植えてどうにかなるというタイプの問題ではなくて、非常に根深い社会問題として見なくてはいけないのだという思いを、この本以来強くしているところです。

「系統樹思考の世界」という本があります。三中さんという東大農学部の先生が書いた本で、彼は分類的な思考と系統樹的な思考というのを二つ比べている。分類的な思考というのは差異を強調するのだけれども、系統樹思考というのは根っこをどんどんたどっていくという思考のパターンのことです。自分がやってきたことも、例えば森林と農地というのは要するに土地あるいは資源の利用問題として総括、再定義できるかもしれない。（これも）一つ系統樹思考の例なのかもしれないと思うようになりました。こういうふうに一つ高次のところで自分が観察している現象をまとめ直すことによって、争点がより明確になるというメリットがあると思います。

アブダクションと「経験」の学問

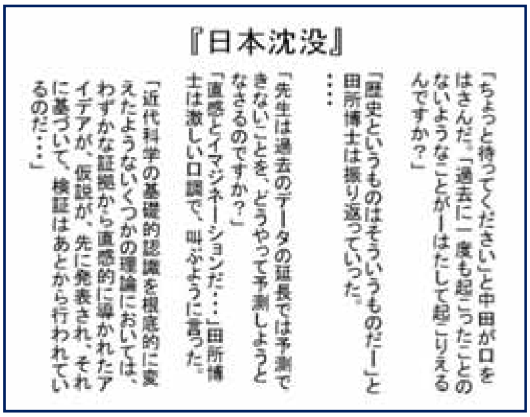
「アブダクション」というとても良い本も出ていますので、細かい説明は省きますけれども、私自身が持っている社会科学に内在する問題について触れたいと思います。

今私たちが乗っかっている近代科学のカルチャーでは、一般的に次の三つの要件を満たすものが良い研究であるとされているのではないかなと思います。普遍性、客観性、論理性、この三つがそろっているということが近代科学にある種説得力を持たせているのではないか。ところが、この三つを推し進めることによって捨象されていく別の価値があるのではないか。この辺の議論も岩波新書で中村雄二郎という人が書いた「臨床の知とは何か」という本にあります。とりわけ私がやっている資源環境問題に絡めて、宇井純が「公害における知の効用」という論文の中で言っていることですが、「被害が認識されたとき、被害者はその被害を全身で感じているが、それを他人に言葉で伝えるように客観化するのは容易なことではなく、多くの場合十分に表現できない。だが、公害の認識は全身的であり、総合的である。これに対して加害者であ

る発生源の認識は、せいぜい汚染物質の濃度や被害者の数といった数字で表現できる部分に限られた部分的なものでしかない。もし公平な第三者と称する者がいて、双方の言い分を均等に聞こうとすればそれは部分と全体の中間をとる認識になり、必然的に加害者と同じ部分の次元になってしまう」。これは宇井が提示した「公害に第三者はいない」という有名なテーゼをサポートする認識だと思います。

ここで部分というのは数字で評価できる客観的なデータがあって、体で感じる、すごく全体的なのだが非常に主観的なものが両方ぶつかり合ったときに、近代科学、言説の世界ではどうしてもこの部分の方が勝つ。要するに両方の話を同じように聞けば、必ず加害者の側にあなたは立つことになるから、第三者なるものがいるなどということをそもそも想定するのは間違いだということを宇井は言っています。この話をもっとポジティブに聞けば、どうすれば経験に即した、宇井の言葉で言う「全身的あるいは総合的な知」というものをくみ上げることができるのだろうか、というクエスチョンにつながります。

似たようなことをちょっと全く別な文脈で考えたのが、小松左京の「日本沈没」という有名な小説です。改めて読み直してみると科学的な知のあり方に関するすごくいいテキストになっていて、学生に読むことを勧めているのですけれども。「日本沈没」では田所博士という学者がいて、いろいろなデータを総合すると日本が沈没するかもしれないというシナリオを描けてしまった。ところが、彼の話はなかなか聞いてもらえない。「日本沈没」の前半でスライド７枚目のようなやりとりがあります。


『日本沈没』

「ちょっと待ってください」と中田が口をはさんだ。「過去に一度も起こったことのないようなことが──はたして起こりえるんですか？」

「歴史というものはそういうものだ──」と田所博士は振り返っていった。

……

「先生は過去のデータの延長では予測できないことを、どうやって予測しようとなさるのですか？」

「直感とイマジネーションだ……」田所博士は激しい口調で、叫ぶように言った。

「近代科学の基礎的認識を根底的に変えたようないくつかの理論においては、わずかな証拠から直感的に導かれたアイデアが、仮説が、先に発表され、それに基づいて、検証はあとから行われているのだ……」

私がこの話をわざわざ真剣に考えなければいけないと思ったのは、日本沈没は非常に端的な例ですけれども、沈没した後に「これこれこういう理由で沈没したのです」と説明するのではトゥーレイトなわけです。社会科学というのはどうも現象が起こった後にそれはこういう理由で起こったのですよと説明して満足するようなところがあるのではないか。何か前向きな社会科学のあり方というのはないのか。ここで言う「わずかな証拠から直感的に導かれたアイデア」というのが、帰納でも演繹でもないアブダクションのことを言っているのだと思うのです。これについて、今日の段階では回顧的な社会科学をどうにかして越えていく必要があるのではないかという問題意識を持っているにすぎません。

アインシュタインが「経験をいくら集めても理論にならない」と言ったそうなのですが、個別で起こっているものをくくるアイデア、つまり「日本沈没」の例で言えばデータをつなげてみるとこういうシナリオが十分あり得るというストーリーを作っていく活動が必要だし、それに名前をつけたのがアブダクションではないかと思います。

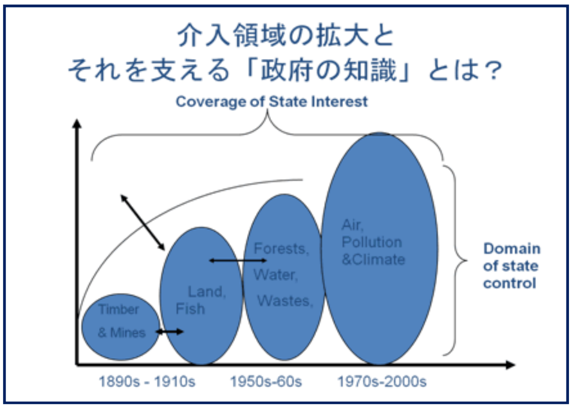
したがって、事例を積み上げて帰納的に平均値や傾向から物を言うのではなくて、違った説明原理のヒントとして事例を集めていく。そのためには従来の説明原理だとこの目の前にある

事象を説明できないという驚きがまず必要で、この驚きを説明するためには違った説明原理を引っ張り出してこなくてはいけない。オーソドックスに帰納的に考えると、従来の説明に合わない事例というのは誤差として弾かれていくわけです。その弾かれてしまう事例を説明するために仮説を思いついていくこと、これがアブダクションという活動になるわけです。これは名人芸的な世界だと思うのですが、こういう活動が大事なのだということは一つメッセージになるのではないかなと思っています。

今後のテーマと視覚

非常に大ざっぱに言うと、民主主義と天然資源の保全の関係についてやりたい。具体的に言うと、自然とか環境の支配が人間の支配にどのようにして転化していくのかということについて国際比較研究をやっていきたいと思っています。発想自体は随分古くからあって、ウィットフォーゲルの 1957 年の“Oriental Despotism”という本があります。これは水の支配形態が特定の権力形態に発展していったプロセスを中国をフィールドにして考察したものです。この中でウィットフォーゲルは「大量の水は大量の労働によってのみ限界内に通路が与えられ、保持されることができるが、大量の労働は調整され、規律され、指導されなくてはならない」と。つまり水の管理は、水を管理する人間の管理というのを必要不可欠にする。水を管理するために訓練された人間というのは、例えば戦争をするときにも役に立つ。

このアイデアというのは、例えば森林を保全するために作られる地図がどんなふうにして人間の支配に転用されていくのかとか、いろいろなところに示唆があるオブザベーションではないかと思います。よりスペシフィックには自然環境の分野に行政が支配領域を浸透させていくプロセス、それとパラレルで「人々の領域」が圧迫を受けていく、人々が行政とぶつかり合っていくということをうまくパターン化できないかなと思っています。



これは非常に大ざっぱな絵ですけれども、例えばタイの天然資源に関する行政組織がどういうふうに発達してきたかを並べてみます。最初は木材とか鉱物に関する制度ができ、やがて土地あるいは漁業資源の管理ができ、森林、水、廃棄物の管理、もっと後になって空気とか汚染とか、最近は気候管理の形で政府のコントロール領域がどんどん増してくるというのが縦軸の部分です。それから、政府の関心の幅が広がってくるというのが横の軸です。仮に、行政の支配領域のエリアを（図左上の曲線のように）たどったとすると、行政の支配が及ばない領域というのがこの線の上になるわけです。ここで人々の抵抗とかだまし合いがいろいろなパターンで起こってくるし、行政同士の縄張り争いとか対立、競合も起こってくる。

従来のコモンズ研究というのは、「人々の領域」の中だけを見るわけですけれども、ここの面積自体が行政のコントロール、浸透によってかなり形を変えてきて制約されているということをまず描いてみて、その残りとして「人々の領域」を考えるという、従来のよくやられている

アプローチとは違う形で研究ができないかなと。また、こういった政府の浸透を支えている基本的な知識、具体的には統計ですけれども、政府がどう統計を集めて、その統計をどう政策に生かしたり生かさなかったりしているのか、ということはかなり実証的に研究できるのではないかと思っています。

「野蛮な民」の生きる術

私自身の研究スタイルについて考える良い機会になったのが、ジェームズ・スコットが比較的最近出した“The Art of Not Being Governed”という本です。これは文明の行き届かないエリアに住んでいる人たちは、実は戦略的に文明から距離を置くことによって自分たちの生活空間を維持してきたのだというかなりラディカルな新しい世界史を描こうとした本です。その中で、山の上の民というのは具体的には三つの戦略を持ってこれまでやってきたのだということをスコットは言っています。

一つは「立ち居地の戦略」で、例えば税を集めるとか、徴兵するとか、そういった中央の触手の届かないところに逃げて奥地に行く。次に中央に拿捕されないよう余り大きな財産を築いたりせずに、家も小さくすぐ引っ越しができるよう非常に小規模・分散の戦略をとる。それから、臨機応変に生活手段を変えていく。

私自身の研究も、彼の言うところの「野蛮な民」とパラレルで考えられるのかなと。意識的にやっているわけではないのですが、私の研究は学問（ディシプリン）の主流からは距離を置くような形でやってきました。それから、地理、歴史、人類学、途上国開発研究、場合によっては経済学とかいろいろなところに顔を出す。地域、方法、課題の間を柔軟に行き来しながらとにかく論文を書いていく。こういうことをやってきたのかなと思った次第です。私のお話は以上です。どうもありがとうございました。

質疑応答

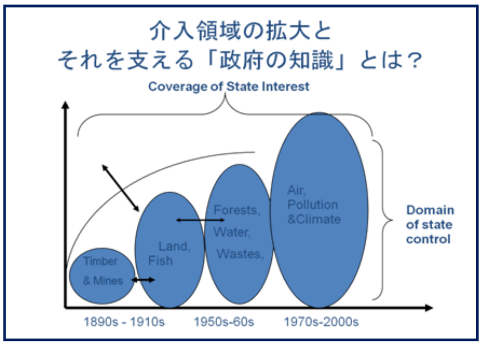
（司会） 私もこの本を拝見したときは、今までの分析の枠組みに縛られず通説や思い込みを捨てて貧困と環境の問題の全体を見渡すような非常に面白い研究で、目からうろこが落ちたのを覚えております。

今日のご発表では、最初に受賞作の紹介とそこから得たインスピレーションと関心の広がりについてお話しいただきました。次に、方法論的な回顧ということで、事実から経験から言えることだけを言っていくという今までの近代科学的なスタイルにとらわれず、より建設的な仮説を見つけていくという方法論的な展開を経てきたというお話を伺いました。それから最後に今後どういった研究に取り組んでいかれるかということについてお話しいただきました。それでは、ご質問、コメントをお願いいたします。

（Q） 自分でやっている地域研究というのは国境線が非常に重要な要件になっている。今日のお話の稀少資源、さらには環境というのは原理的には境界のない話だと思うのです。けれども、佐藤さんの研究は逆に本来境界なく考え得る環境の問題について、敢えて境界の持っている政治（性）を重視されている。そこがユニークだなと思ったのですけれども、逆に言うと佐藤さんの（研究の）本来の価値というのはどちらに向かっていくのかなと。「日本沈没」は割と理科系的な発想の本だと思うのですが、そういう方への志向があるのか、それとも環境問題に限らず例えば農村社会と中央政府の政治的なプロセスといった境界上の問題がご関心の主なのか、あるいはその中間部分を狙っていらっしゃるのか、どういうふうに今後展開されるのか。

（佐藤） どこに行こうとしているのかというのは言い切れないのですが、環境とか資源それ自体よりも人間社会の権力の働き方に私の関心のコアがある。それを環境とか資源というフィルターを通（して見る）ことにどういうメリットがあるかというと、環境とか資源というのは権力とは余り関係がないものであると理解されている。ところが、われわれの選択肢それ自体がかなり外から規定されている面があって、それがたまたま選挙権といった非常に直接的な政治的な回路ではなくて環境とか資源という回路を通じてくるために、その政治性が中和されて見えなくなってしまっている部分がある。とりわけ途上国では土地政策に明確に表れていますが、森林保護の名の下にかなり暴力的なことが行われている。物のフィルターを通じて人間社会を見ることで、より効果的に権力の働き方を見られるのではないかと思っています。もう一つは、環境決定論的な議論というのは最近誰もしなくなった。むしろ人種決定論とか環境決定論というのはタブー視されていると言っていいぐらいですけれども、私はそこに社会科学の説得力を増す一つのヒントがあるような気がしていて。もうちょっと物から人間に接近するという方法論は開拓できる余地があるのではないかなと。

(Q)　「アブダクション」の話に地域研究者は勇気づけられました。アジ研は昔から地域研究をやっていて事例研究は得意なのですが、最近計量経済学や新古典派経済学を学んだ優秀な若者がたくさん入ってくるので、どうやって真偽判定を重視する学問と事例研究を積み重ねる研究が融合するかという話が 50 周年を迎えて盛り上がっている。政府の領域と住民の領域のグラフがありました。研究者として住民側か統治しようとする側につくかというのはかなり際どい。研究者というのは政策研究で協力するスタンスをとりながら住民に近づくときに、やはり自分の立ち位置をどうすればいいのかという葛藤があると思う。そこをどういうふうに解決なさっているのか、お聞きしたいのですが。



（佐藤）　もちろん私も悩んでいます。私がさっき示したのは、要するに歴史なのです。もともと行政というのはどういう資源に関心を持ってどういう制度を作ってきたのか、そのとき人々は何をしていたのか、それを時系列的に並べていって人々と政府のスペースがどう形成されてきたのかという歴史を明らかにする。もちろんそういうことを調べる根本的な動機づけは人々のサイドに立っているのですが、直ちにそれを考えなくてはいけないような研究枠組みにはなっていない。だから、こういう研究をしてすぐ何かの役に立つというわけではない。ただ、「歴史をどう総括するか」というのが最終的に政策判断をするときに自分の足元をしっかりさせる基礎になると思うので、どんな分野をやっていてもやはり必要ではないか。だから、自分ではまだちょっと足場が緩い感じがしているので、先ほどの日本資源論の話もそうですけれども、自分として歴史をどう総括するのかという活動をここ数年やっている感じです。

(Q)　研究者として統治される人間の側に立って統治する方を見ていくときに、よりよい統治の姿とはこうあるべきだと、やはり政府と協力するときにパースペクティブとして今よりも良いものが出てくることを目指していらっしゃるのでしょうか。

（佐藤）　そうですね、ただやはりそこに至るまでにいろいろ手続がある。それは先ほどご紹介した系統樹思考をとったときのメリットの一つなのですが、「選ぶことができたのだけれども選べなかった選択肢」というのは過去にいっぱいあるわけですよね。大抵のことは昔既に考えられていて、場合によっては試みられたことがあったかもしれない。それがなぜうまくいかなかったのか、なぜ実現しなかったのかというのは、やはり自分なりに総括することが次に進むときの重要な参照点になる。

例えば私がずっと調べてきた資源調査会という、戦後できた日本の復興のために資源の総合利用を考える経済安定本部の中につくられた組織で 1949 年に GHQ の指示を受けて水質汚濁に関する勧告の原案というのが作られる。日本の港湾は非常に汚くこのままだと大きな問題が将来起こるということを GHQ に言われて、日本側が排水に関する総量規制の案を作っていたのです。ところが工業会とか通産省から猛烈な反発を受

け、1952 年には骨抜きにされ努力目標みたいな感じで大分格下げになって出るわけです。ご承知のようにその数年後に公害問題が顕在化する。確かにそのときに選択肢があって、しかも政府の中枢部で政策プランとして出ていたものが結局選ばれなかったためにひどい目に遭ってしまった。過去に取り得た選択肢を検証するということが、今日的な動機に照らして歴史を見る人の一つの見方なのかな。つまり今問いかけてくださったような関心を持ちながら歴史を見る人というのは、取り得たのに取ることができなかった選択肢を真剣に考える。それはこれからの行動方針を考える一番役に立つ素材になる。そんなふうに僕は歴史を見ようと思っている。

（Q）　「最初に驚きがあることが重要だ」とありましたけれども、学問の主流から距離を置いて果たして驚きがあるか。つまり学問の主流から距離を置いた驚きというのは個人的な驚きであって、学問的な謎を解明するような驚きではないのではないか。私も移民の研究をやっており同じような問題に直面するのですけれども、一つの学問的なバックグラウンドを持たずにあらゆる分野あるいはあらゆるツールを活用すると、学問的な謎を解明するための驚きというのは生まれ得ないのではないかと思うのです。ご意見を聞かせていただけるとありがたいです。

（佐藤）　自分の学問的な評価は「書いたものを読んでください」ということで、自分で評価を決めるものではない気がするのです。主流からの距離というのは、主流を無視してという意味ではなく、逆に言うと主流をよく知らないと距離がとれない。そういう意味では主流でどういう議論が行われている、だから自分はこういうところにいるという位置感覚というのは当然なくてはいけない。私がつい数年前までいた新領域創生科学研究科という東大の新部局もそうなのですけれども、旧領域についてよく知っていないと新領域が何かというのは言えないわけです。だから旧領域をやりつつ新領域もやるのですが、従来の専門分野の区分け、例えば経済学とか政治学とかに乗っかっているとやはり面白いくくりが出てこない。専門分野ではなくて地域とか方法とか課題でくくっていった方が面白い仮説が出る可能性が高まるのではないか。実際、私は何とか学ではなくてこっちの方でやってきました。

（Q）　主流から距離を置くということは別の普遍性を目指すことになるのか、それとも普遍性そのものに対する何らかの批判的な立場をとるということなのか、どちらなのですか。（佐藤）　先ほど私が特徴づけた近代科学の客観性とか普遍性というのは、自然科学にかなり引きずられた特徴づけだと僕は思っていて、やはり社会科学というのは「こういうことが検証されました」といって終わる話はなく、どちらかというと論争の喚起のところにコントリビューションの所在があると思うのです。ですから、ある言説が普遍性を目指しているという人がいたら、「どんなことが普遍的なのか教えてくれ」と僕は聞きたいです。やはり社会科学の場合絶えず論争の繰り返しだと思うので、ピリオドを打つことではなくて議論の喚起というところに狙いを置

くべきだと思う。
これに関しては "Making Social Science Matter" というデンマーク人が書いた本があって、「物理学を頂点とする自然科学に対する羨望で社会科学をやるというのは間違っている。社会科学の営みというのは自然科学の営みとは全く異なる知のあり方なので、自然科学でつくられたいろいろな基準を社会科学に当てはめるという発想それ自体が間違っている」という。政治学の分野なのですが、いろいろな論争があった本です。ご関心があればご覧いただきたいと思います。

(Q)　私自身もアフリカの企業をやっているのですけれども、あるイシューを追いかけてフィールドワークをして、どうやってまとめるか試行錯誤した結果仮説を書きかえて説明するという、（先生のお話と）似たようなことをやっていたのかもしれないなと思った。試行錯誤して書き上がったものを見たときに、果たしてこれがどれぐらい説得力を持つだろう、と。私は経済学が専門ですけれども、大きくモデルを書き換えたり、新しい考え方を出してくるケースはそれなりの権威のある人がやる場合、もしくはその仮説できれいに説明がつくことが示せた場合は割と影響力がある。先ほど佐藤先生は論争の喚起が大事だという話をされたけれども、新しいものをやるときはいろいろな有象無象のものが出てくる可能性がある。その中で必ずしもきっちり実証ができないケースも多いときに、どうやって論争喚起をしようとするのか、もし何かお考えがあったら教えていただきたい。

（佐藤）　難しいですよね。私自身がやってきた仕事が果たして何か論争を喚起しているかといったら、多分大して喚起していないと思います。ただ、あらかじめ全部を著者が背負う必要はなく評価をオーディエンスに任せればいいのではという気もするのです。やはり自分が面白いと思っていることを、オーディエンスを予想した上でねじ曲げてしまうというのは・・・。もちろん査読論文とかそういう実務的な意味ではあるとは思うのですけれども、基本的な発想のところでは二人か三人分かってくれればいいぐらいの気持ちでどんどんやっていくというのはやはり大事なことではないかなと。
ただ、経済のように分野として非常に成熟し、競争相手も多くて、ジャーナルの階層性ががっちりできているような世界と、私のように余り秩序がない世界では大分状況が違うと思う。明確な競争原理が十分働いていない世界ではまだ言った者勝ちの余地が大分残っているので、精神論としてはオーディエンスにもっと任せるというところがあってもいい。ただ、それでは論文が載らないと言われてしまったらちょっと・・・。でも、論文がだめなら本を書けばいいのではないかなと思うし、いろいろな道があるのでは。

(Q)　先生は文化人類学と公共政策を学ばれた経験があるということですが、分析をしていく際にディシプリンはどのように役に立っているのでしょうか。今まで勉強なさってきた専門的な知識なり考え方なりが今のご研究にどのように影響を与

えていますか。

（佐藤） 余り役に立っていないと言うべきかな。反面教師的に役に立っている面はあると思う。例えば、僕が留学したハーバードのケネディースクールは 1 年目にミクロ経済と統計を無理やり勉強させる。すると、統計的な物の見方というのがおおよそ分かる。それを使うわけではないけれども、そういうことをやっている人たちと話ができるようになるとか、「二つぐらいの村を調べて何が言えるんだ」と言われたときに統計的な人たちの前提を知った上で再反論ができるという点では役に立っている面があるかもしれない。直接役に立つというよりも、アメリカには「反応する文化」があって、例えば最近タイの津波の時の援助物資の分配について英語で論文を書いたらアメリ カの知らない先生からいきなりメールが来るとか、全然関係なかった人から反応が来たりする。そういう文化はアカデミアに一番大事な部分だと思うのですけれども、日本って余りない。書評を書くとかいう話ではなくて、エレベータ ーで会ったときに「最近どんな面白いことやっているの」とか「最近何考えているの」とか、そういう日常的な知的なやりとりが、非常に残念だけれどもやはりアメリカの方があるということを勉強したのが留学のメリットです。

（Q） ご自身が興味を持って研究するテーマについて、その面白さというのは一体どこからやってきて、セレンディピティはどんな局面で現れるのかということについて、ご関心のある範囲で教えていただけますか。

（佐藤） 一言で言うとやはりギャップです。例えば本で勉強したことと現場観察のギャップ、あるいは裏で言われていることと役所で言われていることのギャップ、そこのつかまえ方ではないでしょうか。さっきの驚きということと関係するのですけれども、やはり驚くためには自分の知っていることとまだ知らないこととの間にある種の隙間をつくって、それを確認する作業が必要だと思う。あとは、そういった面白いことに出会うのは人生の中で何回もあるわけではないと思うので、発想が豊かな人たちの本を読むことでまねたいなと。例えば僕が好きなハーシュマンという経済学者がいますが、彼の着想とか話の持っていき方はやはりすごいなと思いますし。

（Q） 私もやはりアブダクションというところに非常に興味を持ったのですけれども、言うはともかく、やはり難しいと思います。フィールドワークの中からどうやって新しい仮説を呼ぶような題材を選ばれるのか、それからどういうふうにケースから新しい仮説を招来することができるのかについてもうちょっと詳しくお伺いしたい。

（佐藤） 一番アイデアの源泉になったのは村人の話です。「私はこういうことを調べたいのだけれども、どう思う？」と村人に聞いてみて、彼らの答えというのがアイデアの源泉になるというのはありますね。ただ、今日の話は決して順序立ててこうなったわけではなく、自分の研究を振り返ったときに、もしかしたらこれはアブダクションという手続でよく説明できるようなスタイルをとっていたのかなと回顧的に総括している

だけです。「どうすれば良いアイデアを思いつくのか」というのは知っていたら私が教えてほしいことなので。さっきの反応する文化ではないですけれども、やはりいろいろな可能性を議論できる場というのはすごく大事ですね。（考えを）取捨選択されたり、思ってもみなかったようなことを思いついたりというのは、やはり議論できる人がいるかいないかで随分違いが出てくると思います。いろいろな源泉を活字にする間の議論の層というのかな。

（Q） 議論の場は大事ということですけれども、日常そういう機会というのは？

（佐藤） 機会を作っています。学生とお互いのドラフトを読み合う会みたいな感じで、インフォーマルな形で。私の普段やっているテーマが変わっていることもあって聞いてくれるのは学生だけなので、彼らを無理やり相手にしています。

（Q） 自分がしゃべる言語を広げていくのも議論の場を広げる意味では大事だと思うのですけれども、「自分が考えていることはこうなんだけれども、それは君の分野で言うこういうことに掠らないか」みたいなことをやっていかないと議論に発展しないと思う。それがディシプリンの主流から距離を置いても、主流から完全にそれて孤立してしまったりしない大事な条件なのかなと思いました。

（佐藤） 英語で書かなければだめだとは思いますね。ただ言葉（の問題）はもちろんあるのですけれども、僕はカルチャーだと思う。やはり日本の教育のあり方の問題ではないかと思います。アメリカの学部のリベラルアーツ教育みたいな、いろいろなものを広く勉強する（教育スタイルは）日本ではもうほとんど実体をなさなくなって、大学に入った瞬間に○○学科の専攻になっているのが大部分だと思う。そこを急がずにいろいろな分野の面白い考え方とか古典的な考え方に触れる機会を若いうちに持っておかないと、食いつく動機づけがないというか、右から入って左に抜けていくみたいな感じになってしまう。懐の深さというか、関心の間口が狭かったら言葉が上手にできても対話にならないと思うのです。あとは日本の場合、議論するとどうしても人格攻撃と受け取られたり、発展的でない議論になってしまうこともあると思う。それもやはり文化がないからだと思うのですけれども。

（Q） カルチャーは作っていくところもあると思うので、最初は慣れなのかと思いますが。

（佐藤） やはり皆忙し過ぎるのだと思う。人の話も本当はもっとゆっくり聞きたいけれども余裕がなくなってしまうのです。これは昔文化人類学者の川田順造先生に教えてもらったことですけれども、「スカラ」という言葉の語源は「暇な人」なので、暇をもっとつくらないとだめなのです。でも、それは昨今の業績主義文化、成果主義文化からすれば難しいですけれども。